ハルハ・トゥメンとその成立について

森川哲雄

第五十五巻　一六八

(一) はじめに

中期モンゴル、すなわちいわゆる明代モンゴルにおけるトゥメン tümen（万戸）がこの時代のモンゴル社会における重要な構成要素の一つであったことは言うまでもない。そしてその制度としては、直接には元朝時代につながるものであったということも周知の通りである。しかしながらこのことは元朝時代に存在したトゥメンと中期社会に存在したトゥメンが、全く同じ集団で、直接的につながるということをも意味するものではない。事実、中期社会に存在したとされるトゥメンの名称と前代におけるいろいろな集団の名称を比較してみてもその間に共通するものは非常に僅かである。同じ様にトゥメンとは呼ばれても、その性格はかなり異っているものであって、その一側面についてはすでに述べたことがある。(1)

このことは当然ながら、中期社会に現れたいわゆるトゥメンが、元朝のトゥメンの崩壊の後、様々な政治的変動

を経て、全く別な形をもって編成させられたものであることを推定させる。この時代のトゥメンは単にこの時代のみにとどまらず、そのいくつかは清代における行政区分の直接的淵源にもなっており、従って中期のトゥメンがいかなる過程を経ていかなる事情のもとに成立したかを知ることは、この時代のモンゴル社会を解明する上でまことに重要な課題である。しかしながらこうした面からの研究は史料不足等のいろいろな事情から今まで殆んどなされていない。

ここでハルハ・トゥメンの問題をとりあげたのは、これらの空白を埋めることを目的としたものである。本来ならば中期のトゥメンをすべて取りあげ、全面的な検討を加えるべきであろうが、それは他日に期し、ここではハルハ・トゥメンの形成について若干の推察を試み、併せてそれに附随する問題を検討したい。

(二) ハルハ・トゥメンに関する諸見解

ハルハ Qalq-a と言えば普通今のモンゴル人民共和国のほぼ全域を指すが、明代の中頃においてはそうではなかった。すなわち当時のハルハは、モンゴリア東部のハルハ河を中心にして遊牧する集団であったらしい。(2)

当時のモンゴリア北部の大部分は依然としてオイラト Oyirad の勢力範囲にあった。ハルハがその領域を拡大したのは明・嘉靖三十一年のアルタン・ハーン Altan qaγan のオイラトに対する征討の結果であったといわれる。(3)

ところで、部族集団としてのハルハは史料的にいつ頃から現われるであろうか。和田清氏はこのハルハ集団の淵源について、明実録、正統三年四月癸酉（二十日）の条に記される、「朶顔衛所属哈剌孩衛指揮揑可来等……来朝

貢馬」とある中の哈剌孩衛が後のハルハの源であり、それは今のハルハ河の名から出たものであると述べられている。[4] ハルハ・トゥメンの名がハルハ河の名から出たということはまず間違いのないところであろう。[5] しかしながら和田氏も指摘されているように哈剌孩衛入貢のことは同実録正統元年十二月戊寅（十七日）の条にも記されており、それには

哈剌孩等衛女直指揮吉列児等、嗢罕河衛女直指揮脱因、托兀者前等衛女直指揮阿剌禿等各来朝貢鷹馬云云

とありこの記事によれば哈剌孩衛とはモンゴル族の集団ではなくて、実は女直に所属するものということになる。哈剌孩衛が女直であったとすれば、「朶顔衛所属」ということは決して無理なことではない。哈剌孩の音がハルハに近いことは認められるが、やはりこの哈剌孩衛とはここで検討しようとしているハルハ集団とは全く関係が無いものと言わねばならない。[6] 漢文史料による限り、魏煥の皇明九辺考、巻四、宣府鎮の辺夷考に記される「罕哈部」が、恐らくハルハの初見であるとみてよい。[7]

同様に蒙文年代記においても具体的な事件の中に部族集団としてのハルハの名が現われるのはそれ程早いことでは無い。蒙古源流 Erdeni-yin Tobči では、ダヤン・ハーン Dayan qaγan の右翼部討征と関連して

十二・トゥメトArban qoyar Tümed と十二オトク・ハルハ Arban qoyar otoγ Qalq-a を対抗させよ。大ユンシェブ Tung yeke Yüngsiyebü と八オトク・チャハル Naiman otoγ Čaqar を対抗させよ。……

という中にあるのが初見である。[8] アルタン・トプチ Altan Tobči もほぼ同様である。[9] 史料の上でハルハの名が見えるのはこのように十六世紀初頭のことであるが、[10] このことはハルハの形成がこの頃であったということを意味す

るものではなかろう。

ハルハ・トゥメンは、ダヤン・ハーンのいわゆる諸子分封に際して、その二子アルチュ・ボラト Alču bolad とゲレセンジェ Geresenje の支配するところになったことからも知られるように、「内」と「外」の二つの部分に分かれていた。[11] 田中克己氏はこの勢力的分裂を、まさにこのダヤン・ハーンの分封時に二子に分け与えられたためと述べられている。[12] この見解は有力なものではあるが、また別の見方も可能である。その「内」と「外」の区分が、トゥメンを分ける左翼、右翼から来たものであることは前稿で述べたところであるが、[13] 或いはハルハの左・右翼間の分裂がかなり早くから生じていて、ハルハに対する分封はその上に立ってなされた、と考えることも出来るのである。私はむしろこの見解をとりたいが、この点については後で若干ふれたい。いずれにしてもハルハがこうした複雑な構造を持っており、また史料上にも混乱があり、従ってハルハに関する従来の研究においても若干の誤解があると思われる。これらのうちの一つは松村潤氏の「ウリヤンハンはハルハの異称」であり、ダヤン・ハーンにより滅されたウリヤンハンの故地にゲレセンジェが分封されたものとする見解である。[14] 事実、ガンガイン・ウルスハル Ganga-yin Urusqal には、氏の指摘する通り「ウリヤンハンのノヤン等の宗族」の項に、

〔ダヤン・ハーン〕の第十一子ゲレセンジェ・ジャライルはハルハの首領となった。その七人の息子は……(以下略)

と記され、あたかもウリヤンハンがハルハの異称であるようにもみえる。[15] そしてガンガイン・ウルスハルでは、ハルハのノヤンの族とはアバタイ・サイン・ハーン Abatai sayin qaγan の長子サブグタイ・オルジェイト・ホンタ

イジ Saburutai öljei-tü qong tayiji とその甥にあたるゴムボ・トゥシェト・ハーン Gömbö tüsiyetü qaγan の弟の系統のみとしている。[16] しかしながらこれには疑問が多い。もしウリヤンハンがハルハの異称であるなら、このことは当然他の年代記にも記されてよいはずであるが、それは全く見られないこと。また蒙文年代記では左翼三トゥメンはチャハルの他に、常にハルハとウリヤンハンを並べてあげていること。更に内外ハルハの多くの年代記にはハルハの宗族をガンガイン・ウルスハルのように限定している記録は全く見られないということ。そして後に検討するようにハルハ集団の成立の事情からみてこの見解は受け入れがたく、ハルハとウリヤンハンは別個の集団としてみねばならない。[17]

またこれに関連して、和田氏の「ジャライル部がウリヤンハンである」とする見解がある。[18] この理由として氏は蒙古源流にダヤン・ハーンの妃の一人、より正確に言うならゲレ・ボラト Gere bolad とゲレセンジェの母であるスメル・ハトン Sümer qatun がジャライル Jalayir のフトグ・シグシ Qutuγ sigüsi の娘と記されているのに対し、蒙古世系譜・巻四ではこのフトグト・シグシ（呼図克図少師）をウリヤンハン（無量漢）の人としていることをあげている。しかしすでにウラジーミルツォフも述べているようにジャライル部はハルハに所属する一オトクであって、[19] この見解に対しても疑問を抱かざるを得ない。

実は以下に述べるようにダヤン・ハーンのこの妃については蒙文年代記の間に様々な伝聞があり必ずしも一定してはいないのである。ともかくも和田氏が根拠とされたいくつかの年代記の記述についてもう一度検討してみたい。今までの研究によれば、蒙古世系譜はハラチン Qaračin の年代記であるが、その内容はほぼアルタン・トプ

チに一致するという。[20] 勿論蒙古源流とも多くの点で共通しているが、この部分はやはりアルタン・トプチからの引用である。

しかしながらこの点を検討する場合、スメル・ハトン（アルタン・トプチではサムール・タイフ Samur tayiqu とする）だけを対象とするのは不充分である。実はこれはダヤン・ハーンの母の出身部族とも関連しており、その両者を比較してみる必要があるからである。蒙文年代記ではダヤン・ハーンの父を一様にバヤン・ムンケ・ボルフ・ジノン Bayan möngke bolqu jinong としているが、[21] その母シケル・タイフ Siker tayiqu とシケルの父の所属する部族について、年代記の間に種々の相違がある。すなわちアルタン・トプチやアサラグチ・ネレトイン・テウケ Asaraγči Neretü-yin Teüke 等はこれをウリヤンハンのフトグト・シグシの娘とするのに対し、[22] 蒙古源流、ジャラグスン・フリム Jalaγus-un Qurim、シラ・トゥージ Sira Turuji 等はこれをウルグート Ururud のオロジュ・シグシ Oroju sigüsi の娘とする。[23] ところがダヤン・ハーンの妃であるスメル・ハトン（サムール・タイフ）については更に複雑である。アルタン・トプチや蒙古世系譜はこれをウリヤンハンのフトグト・シグシの孫娘とするのに対し、[24] 蒙古源流はジャライルのフトグ・シグシの娘とする。[25] そして外ハルハの年代記はこれをウルグートのオロジュ・シグシの娘ジメスケン・ハトン Jimesken qatun であるとし、[26] またボロル・エリヘ Bolor Erike はウリヤンハンのシグシの娘ジメスケン・ハトンとしている。[27] これらを表にすると次頁のようになる。

この表によっても分るように(A)と(B)との組み合わせで一致するものは少なく、年代記間に多くの相違が見られる。従ってこれらの相違を無視して同じものとすることは問題である。これらの年代記はいずれも異った伝聞の一

(B)ダヤン・ハーンの妃	(A)ダヤン・ハーンの母	
ジャライルのフトグ・シグシの娘 スメル・ハトン	ウルグートのオロジュシグシの娘 シケル・タイフ	・蒙古源流
ウリヤンハンのフルグトシゲシの孫娘 サムール・タイフ	ウリヤンハンのフトゲトシグシの娘 シケル・タイフ	・アルタン・トプチ ・蒙古世系譜
ウルグートのオロジュ・シグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウリヤンハンのフトグト・シグシの娘 シケル・タイフ	・アサラグチ・ネレトイン・テウケ ・アルタン・クルドウン・ミンガン・ケゲスト・ビチク(28)
ウルグートのオロジュ・シグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウルグートのオロジュ・シグシの娘 シケル・タイフ	・ジャラグスン・フリム ・シラ・トゥージ
ウリヤンハンのシグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウリヤンハンのフトグト・シグシの娘 シケル・タイフ	・ボロル・エリヘ

つを伝えているのにすぎないのであって、この他に有力な証拠が無い限り、これを以てジャライル＝ウリヤンハンとすることは出来ない。勿論ダヤン・ハーンの母や妃の出身部族を正確に定めることは重要なことであるが、ここでは問題を異にするのでこれ以上は述べないことにする。いずれにしても、ジャライルとウリヤンハンは次元を異にする集団であり、次章において明らかにする如く、当初ジャライルはハルハに所属する一オトクであり、ウリヤンハンはトゥメンであったのである。

(三) ハルハに所属する諸集団とその関係

すでに述べたようにハルハは内と外の二つに分かれていたが、それぞれに多くのオトクが所属していた。内モンゴルの年代記ではハルハ全体を言う場合は常に十二オトクとする。[29] しかしこれはオルドス・十二オトク、[30] トゥメト・十二オトク[31]というようにかなり作為的なものがあり、かつそこから分かれたという外ハルハの七オトクについてはその内容が何であるか殆んど伝えず、アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲスト・ビチク Altan Kürdün Mingran Kegesütü Bičig は「不明 medekü ügei」とさえ記している。[32] しかし、外ハルハの年代記作者たちは決して自らを十二オトクとか七オトクとかでは呼んでいない。すなわちハルハに属するオトクの数は当初からずっと多かったからである。

それでは具体的にいかなる集団がハルハに含まれていたであろうか。内ハルハの年代記であるアルタン・クルドゥンやボロル・エリヘによれば、十六世紀後半、内ハルハにはジャルート Jarud、バーリン Barin、バヤウト

Bayaud、ホンギラト Qonggirad、オジイェト Öjiyed[33]の五オトクがあったといい、[34]また外ハルハの年代記であるアサラグチ・ネレトイン・テウケやシラ・トゥージによれば、外ハルハにはジャライル Jalayir、ウネゲト Üneged、ベスート Besüd、エルジゲン Eljigen、キレグート Kiregüd (Keriid)、ゴールラス Γoorlus、フルフ・キュリエ Quruqu küriye、チュググル Čügügür、フフジット Kökejid、ハタギン Qatagin、タングート Tangγud、サルタグル Sartaγul、ウリヤンハン Uriyangqan の十三オトクあったという。[35]少なくともハルハ全体でオトクと呼ばれる集団はこれだけあったのである。もっとも当初からこれらの集団がみんなハルハに含まれていたかは問題があろう。ウラジーミルツォフはハルハ・トゥメンの中にウリヤンハンの名が見えることから、滅されたウリヤンハン・トゥメンの中の数オトクがハルハに加えられたと述べている。[36]このウリヤンハンの滅亡について蒙古源流は、中期六トゥメンの一つであるウリヤンハンが、ダヤン・ハーンに叛旗を翻し、結局滅されたことを伝え、その最後に、

〔ウリヤンハン・トゥメン〕の残った者を服従させて、連れて五トゥメンに収容し、トゥメンなる名を捨てしめた。

と記している。[37]もっとも最近の研究によればこのウリヤンハン討滅はダヤン・ハーンの業績ではなく後人の業績であったようである。[38]しかし後世トゥメンとしてのウリヤンハンは全く現われず、従って蒙古源流のこの部分の記述はウリヤンハン討滅後の何らかの事実を伝えたものとも考えられよう。すなわち和田氏はこのウリヤンハンの討伐に関連して、その潰滅の後、そこにウラト Urad (烏喇特)、マグ・ミンガン Maγu mingγan (毛明安)、ドルベン・ケウケト Dörben keüked (四子) 等があらわれたことを明らかにされている。[39]これらのうちマグ・ミンガン

はトゥメトに所属し[40]、ウラトとドルベン・ケウケト（ケウケトとして）はオルドスに所属している[41]。とすればハルハにおけるウリヤンハン・オトクもこれと同様にみれないこともない。しかしこの場合、単なる名称の一致だけでそれを結びつけることには問題がある。というのは当時ウリヤンハンという名前の集団はモンゴリアに広く見られたからである。そしてそれらのうち東部のウリヤンハン三衛や、北西部のウリヤンハンは著名なものである[42]。従って単なる名称の一致からだけでは決め難いものがある。ただいずれにもせよハルハの名のもとに成立した集団の初期の形と、先にみたハルハ集団との間に、内容的に大きな違いがあったとは思われない。

ところでこれらの多くのオトクは、年代記において、いわゆる諸子分封を記す際に全く同列に並べられている。しかしこれは表面的なことで、その間に集団の大小、勢力的な強弱があったことは容易に察しがつく。とすればこれらの集団において、特にダヤン・ハーンの子孫たちの支配下に入る前において、こうした力関係に基づく支配・被支配の関係もあったとみねばならない。

内ハルハは五オトクとして知られるが、そのうちまずジャルート部が注目される。蒙古源流はダヤン・ハーンのいわゆる右翼部討征について記している中で、その功績者の一人としてジャルート部のバガスン・ダルハン Baγasun darqan の名をあげ、その功績によりダヤン・ハーンの唯一の娘トロルト・グンジ Törültü günji を与えられタブナン tabunang になったことを記している[43]。更にウリヤンハンの討伐に際しても彼はハルハの代表者として名を連ねている[44]、内ハルハは後にダヤン・ハーンの子アルチュ・ボラト Alču bolad の支配するところとなるが、その子ナラハチ・ハサル・ノヤン Quraqači qasar noyan を経て更にその息子たちの代になった時、長子であるウバシ

・ウイジェン・ノヤン Ubasi uijeng noyan がジャルート・オトクを分封されている。[45] これらの点からみて、内ハルハにおいて、まずジャルート部が有力な集団であったとみてよいであろう。

しかしながら、内ハルハにおいてはこの他に注目される集団がある。それは同じように五オトクの一つに数えられているホンギラト部である。ホンギラト部の名前は元代から著名であるが、中期においても年代記の中に比較的早く現われる。蒙古源流やアルタン・トプチによれば、ハルグチュク・タイジ Qarručur tayiji とエセン・タイシ Esen tayisi の娘セチェク・ベイジ Sečeg beyiji との間に生まれた子、すなわち後のバヤン・ムンケ Bayan möngke がエセンの迫害を受け殺されそうになった時、これを助けて四人のサイトたちが、蒙古源流ではウルグートのオロジュ・シグシのところへ、アルタン・トプチではウリヤンハンのフトグト・シグシのところへ護送したことが記されているが、その四人のサイトの中にホンギラト部のアサリ・タイブ Asali tayibu の名が見える。[46] 更にダヤン・ハーンの右翼部討征に関連してやはり同部のバートル・クリスン Baγatur kürisün の活躍が記され、その功績によりダルハンとなったという。[47] ホンギラト部が元代においてかなりの勢力を有していたことは言うまでもないし、またここに記されたアサリがタイブ（太保）の称号を持っていることも注意されよう。これらの僅かな例からではあるが、ホンギラト部も内ハルハにおける有力な集団であった、ということが言えよう。

しかしながら二つの集団が同時に顕著であった、というわけではない。すなわちジャルート部の名はダヤン・ハーンの右翼部討征をきっかけとして現われ、それ以前は全く見られないのに対し、これ以前までしばしば見えていたホンギラト部の名は、以後年代記の中に殆んど見えなくなっている。また内ハルハの他の諸集団は、かなり後に

なるまで年代記の中に登場しない。以上の事柄は、内ハルハにおいては当初ホンギラト部が最も有力であったが、後その地位がジャルート部に代られた、ということを意味するものではないだろうか。[48]

それではこの点外ハルハにおいてはどうであったか。外ハルハの年代記はこのことに関して非常に興味ある話を伝えている。例えばシラ・トゥージはダヤン・ハーンの末子ゲレセンジェが外ハルハに分封された事情を次のように述べている。[49]

ゲレセンジェが七ホシグ Dolorran qosiru に座した事情は、ダヤン・ハーンのところにチノス Činos 部[50]のウダ・ボロト Uda bolod が毎年野生のラバを殺して乾したものを届けていた。ある時彼が行く時、「隷民 qaraču kümün をジャライルとケルート Keriid のシグチ sigči たちが支配している。彼らにどうして支配させようか。今私はハンなるエジェンから一人の息子を求めるために来たのである。」と申し上げれば、ハーンは同意してジメスケン・ハトンの上の子ゲレ・ボラト Gere bolad を与えた。ウダ・ボロトは翌年ゲレ・ボラトをハーンのところに連れて行って申し上げるには、「エジェンなるハーンの子の横着は甚しい。長 eki のいないハルハの〔人衆の〕性質は荒い。育てられたあなたのアルバトゥ albatu がこれより後苦痛を持って従ったらどうしよう。」と返して来た時、遊んでいるゲレセンジェという名の子を連れていったのを知って、ハーンの側にいる大臣たちが言うには、「ハーンは恵んで自分の子を賜ったのに反対に送り返した。今どうして秘かに盗んでゆくのか。追って処罰しよう。」と言えば、ハーンは「奴隷 boγol となして使うのではないから連れて行くがよい。」と言って追わせなかった。ウダ・ボロトは自分の子として育てて、オジイェト Öjiyed のムング

ジェイ・ダルガ Mönggüjei daruγa のハトンハイ Qatunqai という名の娘、ウリヤンハンのメンドゥ Mendü のムングイ Mönggüi という名の娘のこの二人のフダ quda となろうと婚約した。……

シラ・トゥージによればゲレセンジェは一五一三年生まれで、長子アシハイ・ホンタイジは一五三〇年生まれであるとするから、[51] ここに記されたことは十六世紀初頭のことである。これによれば当時外ハルハをジャライルとケルート（アサラグチではキレグート）のシグチたちが支配していたという。もっともこの年代記を訳したシャスティナ氏はこの部分をただ「ジャライル部のシグチたちが支配している」とだけ訳し、ケルートについては欠落させている。[52] しかしこの部分は明らかに「ジャライルとケルートのシグチたち」であり、この点はシャスティナ氏の誤脱であろう。しかし問題はそれで終るのではない。アサラグチ・ネレトイン・テウケもほぼこれと似たことを伝えているが、この部分を次のように記している。[53]

昔ダヤン・ハーンのところにハルハのチノス部のウダ・ボラトなる者が来て、「今ハルハをジャライルのシギチ sigiči たちが支配している。エジェンの生んだ子を与えよ。」と頼んだ。

すなわちここではただ「ジャライルのシグチたち」とのみ記され、ケルート（キレグート）については何らふれられていない。ガルダン Galdan のエルデニイン・エリヘ Erdeni-yin Erike もアサラグチと同様のことを伝えている。[54] 従っていずれにせよここは非常に問題のある部分なのである。これらの年代記の間に相違が見られるのは何故か。思うにこれは決して理由の無いことではない。

まず外ハルハにおいてジャライルとケルートの両オトクがいかなる関係にあったかを明らかにせねばならない。

欽定外藩蒙古回部王公表伝、巻四十五、土謝図汗部総伝、巻六十一、扎薩克図汗部総伝によれば、外ハルハは普通のトゥメンと同様、左、右二翼に分かれていたことが知られるが、ゲレセンジェの長子アシハイ・ホンタイジ Asiqai qong tayiji が右翼部を、第三子ヌグヌフ・ウイジェン・ノヤン Nuγunuqu uijeng noyan が左翼部を統轄したということはすでに前稿で述べた。[55] ところでアサラグチやシラ・トゥージによればアシハイ・ホンタイジはジャライルとウーシン Üüsin（アサラグチではウネゲトとする）の二オトクを、またヌグヌフ・ウイジェン・ノヤンはケルート（アサラグチではキレグート）とゴルラスの二オトクを分封されたという。[56] すなわち右翼部長たるアシハイの分封地の一つにジャライルが、また左翼部長たるヌグヌフの分封地にケルートが含まれているのである。このことはシラ・トゥージの伝えるところからすれば決して偶然ではない。この二つの集団がそれぞれの翼の中でもかなり有力な集団であった、ということは決して無理な推測ではあるまい。そうであるとするならこのことは更に、外ハルハにおいて、このジャライルとケルート両集団が、「支配的」集団であったことをも意味するのではなかろうか。つまりシラ・トゥージの「ジャライルとケルートのシグチたちが支配している」という表現はまさにこのことを反映したものと考えられる。

それではジャライル部とケルート部の関係はどうであったかと言えば決して対等であったのではない。その実質的な勢力がどうであったかは詳らかではないが、いくつかの年代記に記されている事柄から検討を加えてみよう。すでに記したようにゲレセンジェの長子アシハイがジャライル部を、第三子ヌグヌフがケルート部を得ていることからして、まずジャライルがより優勢な集団ではなかったかと推測される。このことはいくつかの点から裏付けら

れる。その一つは外ハルハの支配者となったゲレセンジェが、多くの年代記の中でジャライル・ホンタイジ J̌alayir qong tayiji と呼ばれていることである。[57] 更に蒙古世系譜は外ハルハをジャライル・ハルハ J̌alayir Qalq-a と呼んでいることもあげられよう。[58] これが外ハルハにおけるジャライル部の優位さを示すものでなくて何であろう。蒙古源流がダヤン・ハーンの妃の一人をジャライル出身としているのもこうした事情によるものであろう。[59] これらの点からみて、十六世紀初頭において、ジャライル部が外ハルハを代表する集団、言い換えるなら、外ハルハという集団をまとめあげる点において最も影響力のあった集団であった、ということが出来るのである。アサラグチやエルデニイン・エリヘの「ハルハをジャライルのシギチたちが支配している。」というのはこのことを伝えたものと理解してよかろう。これに附言するならば、蒙古源流によるとバルス・ボラト・ジノン Barsu bolad jinong の長子でそのジノンの号を継いだグン・ビリク・メルゲン・ジノン Gün bilig mergen jinong の妃の一人にアバガ・ベルゲン・ハトン Abaγa bergen qatun がいるが、彼女の父はまさしくジャライルのエセン・シゲチン Esen sigečin であったという。[60] このことによっても外ハルハの年代記の伝聞が信憑のおけるものであることが伺われよう。

以上十六世紀初頭のハルハにおける諸集団の関係を検討した。すなわちハルハに所属する集団の中で、内ハルハにおいては古くはホンギラト部が、後にはジャルート部が最も有力な集団であり、外ハルハではジャライル部が最も有力であったことを明らかにした。それではこうした形の集団とその関係がどのような要因から生み出されたものであろうか。

(四) ハルハ集団と元代左手五投下部族群

十六世紀前半のハルハにおける以上のような情況が、中国における元朝の滅亡後、モンゴリアにおいて長期に亘って起こった様々な政治的事件の影響を受けたものであることは言うまでもない。ただその影響がどのような形に現われているかは別として、果してこのような形態の集団がこの時代になって全く新しく生み出されたものであろうか。これを検討する史料は今のところ無いが、ハルハの場合、その源流をもっと古くに求められると思われる。しからばそれは何であろうか。

護雅夫氏の研究によると、元代の東モンゴリアには五つの大きな投下領、すなわち、いわゆる「左手の五投下」があったという。[61] 投下というのは「諸王、駙馬、功臣の分地」であり、[62] また「部族的封建領を意味するもの」[63] と考えられているが、その意味の厳密な詮索はともかくとして、護氏によればこの「左手の五投下」というのはジャライル部を総帥とする、ジャライル部、オンギラト Onggirad (Qonggirad) 部、イキレス Ikires 部、ウルート Urud 部、モングート (マングート Mangγud) 部の、五部族の投下であるという。[64] またこれらの部族の投下領の場所について護氏は、ジャライル部はオナン Onon、ケルレン Kerülen 両河の地点から合流点にかけて、ウルート、マングート部はその東方、両河の地に、またオンギラト部とその一門のオルフヌート Olurunud、ゴルラス、イルゲキン Ilgekin や、またイキレス部はフルン、ブユル両河の北、アルグン、ガン河流域にあったと述べられる。[65] そしてこれらの部族のうちジャライル部は元朝秘史に「木合黎国王は左手の合喇温只敦に凭れる万戸を知れ」、と記されている

ように、[66] チンギス・ハーンの治世の当初から万戸（tümen）となっていたことが知られるが、更にその後イキレス、マングート、オンギラト、ウルートの各部も次々と万戸に発展したという。[67] 更に氏はモンゴリア西部、ほぼアルタイ山付近にもアルラート Arlad 部を最有力集団とするアルラート、スルドス Süldüs、バーリン、ウリヤンハン、フーシン Hügüsin のいわゆる〝右手〟五部族の投下があったと述べられている。[68] そして護氏はこの投下領の主要な軍隊こそ探馬赤 tanmači 軍であって、例えば金国の討征はジャライル部のムカリを筆頭とする左手の諸投下探馬赤部族により主に行なわれ、中でもジャライル部とそれに直属する先鋒部族の活躍は著しかったと述べられている。[69]

以上護氏の研究により、元朝初頭においてモンゴリア東部ではジャライル勢力の力が強かったことが知られるわけであるが、この状態はその後もずっと続いたようである。チンギス・ハーンの功臣の一人であったこのジャライルのムカリは国王の称号を得ているが、和田氏によれば、この称号はムカリの子孫に次々と継承され、その七世の孫俺木哥失里にまで、すなわち元朝最後の皇帝である順帝の時代にまで及んでいるのである。[70] これによって少なくともジャライル部の勢力が元朝一代を通じて保持されたことが知られるが、元朝崩壊以後もその力を保ったようである。明実録洪武二十年六月丁未（二十九日）の条に、故元将納哈出が明の朝廷に降ったことが記されている。それによればこの時降った納哈出の所部は十余万あり、この時の降衆は全部で二十余万もあったという。この数字がどこまで信頼するに足るかは問題であるが、納哈出の勢力が非常に大きなものであったことには変わりない。そしてこの納哈出こそは国初群雄事略に「納哈出木華黎裔孫也」と記されているように、ムカリの後裔であり、当然ながらジャライル氏の出であった。[71] 従って明初においてもかなり長期に亘り興安嶺、遼東の地においてジャライル系

の勢力が強かったことが言えるのである。ところでこの納哈出は洪武二十一年七月に死亡し、その後その子の察罕が瀋陽侯として封ぜられている。しかし彼は洪武二十六年、藍玉の党に座して伏誅されたという。[72] 中国史料において、元朝からの直接のジャライル氏の系統の動静はここまでたどれるが、その後モンゴリア東部、遼東、興安嶺地方のジャライル勢力がどうなったかを明史料から知ることは殆んど出来ない。

ところで和田氏の研究によれば中期の六トゥメンのうち左翼部のハルハはチャハル Čaqar の北辺に接してハルハ河を中心とした地方にあり、ウリヤハンはオルドスの北部、ユンシエブ Yüngsiyebü の北部を指し、チャハルは今の克什克騰 (Kesigten) 部を含んでほぼ錫林郭爾盟の境内にあったという。[73] ということはこれら左翼三トゥメンは元朝の左手の投下の位置を指しており、なかんづくハルハはその全域がその地に含まれていると言えよう。このことはハルハ集団の形成にとっても大きな意味を持っていたと考えられる。

結論から先に言うなら元代の左手の五投下部族群と中期のハルハ集団の間に密接な関係があったということである。地理的位置の共通性はいま述べた。更にそこに所属する部族集団の名称からしても多くの共通点をみることが出来る。トゥメンであったジャライルやホンギラト（オンギラト）はその著しいものである。その他ホンギラトの一門であったというゴルラス、イルジゲン[74]や、左手五投下の地に安堵されたというバヤウト、[75] 更にはバーリン等があげられよう。[76] これらはすべてハルハのオトクとして現われている。これらに加えて左手五投下の中でも優位にあったジャライル部とホンギラト部はやはりハルハ・トゥメンにおいても有力な集団であった。すなわち元朝左手五投下部族群とハルハ・トゥメンとの間に重要な点において相違をみることは出来ない。

勿論ハルハ集団と左手の五投下部族群が全く同一の集団であるというのではない。事実ハルハ集団を構成していたオトクの中にトゥメンにまで発展したというイキレス、マングート、ウルート等[77]の名を見ないし、また先に述べたように中期に入ってかなり後に何らかの原因で組み込まれた集団もあった。元朝崩壊とハーン一族の衰退、明の永楽帝の北方遠征、更にはトガン、エセンと続くオイラト勢力の東モンゴリアへの浸透等、これらの事件のいずれをとってみても、かつての部族集団の受けた影響は小さくなかったはずである。従って左手の五投下部族群のいくつかの有力な部族が没落し他の集団に吸収されたとみることも出事よう。しかしながら多くの異った点はあるにしても先にみた基本的な点が一致している以上、中期に見られるハルハ集団とは、元代の左手の五投下部族群を淵源として成立したものであることは間違いない。

ところで左手の五投下部族群的集団が、如何にして保たれ、ハルハ集団に移行し得たのであろうか。当然ながら、後世オトクとして現われる、それらを構成していた個々の集団がバラバラに存在していたとは考えられず、少なくとも一個の集団としてあり得た以上は、その中にその集団を統率する中心的集団があったとみるべきである。とすれば後世「ハルハを支配していた」ジャライル部こそその最も有力なものと言えよう。先にみたように、それは五投下部族群の統轄部族であり、元朝を通じてモンゴリア東部で大きな勢力を誇り、明初にまで至っている。そして十六世紀始めにおいても、ほぼ同地域で、最も有力な集団として、存在していた。勿論この間史料的に百年余りもの空白があり、この点無視し得ないものがある。しかし十六世紀初頭においてハルハを「ジャライルのシグチたちが支配している」という情況は、その間においてもジャライルの勢力には、それ程大きな変化はみられなか

った、と考えられよう。勿論アサラグチや、シラ・トゥージは外ハルハの年代記であり、従ってそこに言うハルハとは外ハルハを指すものであるが、以前はハルハ全体に及んでいたのではなかろうか。ハルハ集団が元代左手五投下部族群の延長上にあるものとすれば、以上の推測は決して不当なものではあるまい。従ってハルハ集団の形成において、ジャライル勢力が最も大きな役割を果した、と言うことが出来よう。

ハルハは後にいわゆるダヤン・ハーンの六トゥメン Jirγuγan tümen の一つに組み込まれたわけであるが、先にふれたようにハルハは右翼・左翼を単位として分裂した。若干このことについてふれておこう。この分裂した事情についてはともかく、それがダヤン・ハーンのいわゆる分封以前に生じていたものと考えたい。その理由の一つは、前章で引用した、ゲレセンジェが外ハルハを支配するようになった事情である。この場合彼を養子としたウダ・ボロトの行動が内ハルハとは無関係になされている。このことは内外ハルハが殆んど独立した状態にあった証左であろう。他の理由は、両ハルハの対ハーンに対する関係の相違である。すなわち内ハルハの場合ハーンとはかなり緊密な関係にあったのに対し、外ハルハはそうでなかったようである。例えば前章でも述べたように、ダヤン・ハーンの右翼部討征や、ウリヤンハンの反乱鎮圧等において活躍しているのは内ハルハに所属する者たちであり、この際ジャルートのバガスン・ダルハンがダヤン・ハーンの公主を娶ったということはその顕著な例である。これに対し外ハルハがハーンに対して全く無関係の状態にあったということはないけれども内ハルハに比較すればかなり稀薄であった感は免れない。ともかく外ハルハはずっと後になるまで政治的な事件には殆んど現われていないが、これは強ち史料のせいだけとは言えまい。十六世紀後半、トゥメン・ジャサクト・ハーン Tümen jasaγtu qaγan

が各トゥメンの有力者にジャサクを与えた時、ハルハの代表として内ハルハのバーリン部のシュブハイ Šubuqai がそれを得たこと、[78] また同じころ外ハルハのトゥシェト・ハン部の祖アバタイがハーンを唱えていること等は、ハルハの分裂の根の深さを示すものに他ならない。従ってこれらのことも内・外ハルハの分裂がかなり早いものであったことを示すものであろう。

以上本章では中期のトゥメンの一つとして現われるハルハ集団が、かつての左手の五投下部族群の延長上に成立したものであり、その過程においてはジャライル部が最も大きな役割を果したことを述べた。

(五) 外ハルハとジャライル族

後世外ハルハの諸集団はすべてゲレセンジェの子孫たちが支配するようになった。しかしながらこのことは旧来からの有力な部族の力がただちに衰えたことを意味するものではない。ハルハの新しい支配者となったゲレセンジェやその子孫たちは決して彼らの力を無視することは出来なかったはずである。ただ後世の年代記はすべてボルジギン氏族の活動やその系譜に重点を置き、彼らと同じように活躍していた多くの部族については殆んどと言ってよいくらい記していない。しかし年代記の一部にはこれらゲレセンジェとその子孫が、いかなる部族の者と婚姻を結んだかを記しており、それによってこれらの部族の動向をある程度知ることが出来、それはまた重要な問題を含んでいる。

オルドスのグン・ビリク・メルゲン・ジノンの妃の一人アバガ・ベルゲン・ハトンがジャライル族の出身であっ

たことは先に述べた。当然のことながら外ハルハにおいてはその支配的な集団であったジャライル族とボルジギン氏族との間の通婚の例は非常に多い。しかし問題はそれだけでは無い。重要なことは、この関係の中からのみ後のハルハの有力な支配者が現われていることである。すなわち両者の関係の中でまず次の三例が注目される。

(一)ゲレセンジェの長子アシハイ・ホンタイジの妃の一人はジャライルのオルチャチ・ミンガン Olčači mingγan の娘、アルタガン・ハトン Altaγan qatun であったこと。[79]

(二)同じゲレセンジェの第三子ヌグヌフ・ウイジェン・ノヤンの長子アバタイ・サイン・ハーン Abatai sayin qaγan の第三妃はジャライル出身のホルマン・セチェン・ハトン Qolman seče̦n qatun であったこと。[80]

(三)ゲレセンジェの第四子アミン・ドゥラハル・ノヤン Amin duraqal noyan の子モール・ブイマ Mooru buyima の妃はジャライル出身のイマガン・グトグン Imaγan γutuγun であったこと。[81]

ここにあげた三例について更に言うなら、(一)アシハイ・ホンタイジとアルタガン・ハトンとの間に生まれた子のうち、長子バヤンダラ Bayandara の系統は後のジャサクト・ハン部、J̌asaγtu qan ayimaγ に連ながり、[82] 次子トゥメン・ダラ・ダイチン Tümen dara dayičing は後の外ハルハの実力者の一人で、ロシア史料にアルトゥン・ツァーリ Алтын царь として知られるウバシ・ホンタイジ Ubasi qong tayiji の父であること。[83] (二)アバタイ・サイン・ハーンは周知の通り外ハルハに黄帽派ラマ教を導入し、またその領域拡大に貢献した実力者であったが、[84] この妃との間に生まれた子エリイェケイ・メルゲン・ハーン Eriyekei mergen qaγan は後のトゥシェト・ハン部 Tüsiyetü qan ayimaγ の系統につながること。[85] (三)この間に生まれたショロイ・ダライ・セチェン・ハーン Šoloi

dalai sečȩn qa̧ran はセチェン・ハン部 Sečȩn qan ayima̧r の始祖であること。[86] 言うまでもなくこれらのジャサクト・ハン、トゥシェト・ハン、セチェン・ハンの三部は十六世紀後半から外ハルハを分けた三大集団である。これらの支配者は今見たようにすべてゲレセンジェの子孫とジャライル族との婚姻によって生まれた子の系統から出ている。このことは前章において述べたことよりすれば決して偶然の結果ではない。恐らくは当時、ハルハにおいて真に実力者たり得たのは、ゲレセンジェの子孫であると同時にジャライルの血をひくものでなければならなかったと言えよう。事実アバタイ・サイン・ハーンの長子はその第二妃でスルドス出身のドンギル・ハトン Dönggir qatun との間に生まれたサブグタイ・オルジェイト・ホンタイジ Saburutai öljei-tü qong tayiji であったし、[87] またセチェン・ハン部の祖モール・ブイマはアミンの第三子でさえあった。[88]

両者間のこうした例はその他にも見られ、[89] またボルジギン氏の女子がジャライルの男子に嫁している例も多い。こうした形態がすべて同じ結果を生んだわけでは無いが、ゲレセンジェの子孫たちが、ハルハの中で最も有力な集団であったジャライルと婚姻関係を結ぶことにより、自己の勢力の拡大を企図したことも疑いないだろう。

しかしながらジャライル族の勢力がいつまでもハルハにおいて維持されていったかどうかはまた別個の問題である。ジャライル・オトクがゲレセンジェの長子アシハイ・ホンタイジに与えられたことはすでに述べた。それではこの集団はその後どうなったか。残念ながら蒙文年代記は以後について全く記していない。ただ我々には十七世紀初頭の外ハルハの情況を伝えた記録がある。それは一六一八～一九年にロシア皇帝の命を受けてロシア人として始めてモンゴリアを通り、中国（明）に達した、イワン・ペトリン Иван Петлин の報告である。[90] 彼はトムスクを出

発し、ウプサ・ノール付近にあったアルトゥン・ツァーリの本営を経て南東に下り、ゴビを通り、帰化城を経由して北京に達している。ハルハについて彼は次のように報告している。[91]

……Алтын царь から次のウルスまで五日かかる。ウルスは Алгунат という。そこにいる領侯は Тормошин である。また Тормошин のウルスから Чекуркуш ウルスまで五日かかる。そこにいる領侯は Каракула である。また、Каракула のウルスから次のウルスまで五日かかる。ウルスは Сулдус という。そこには Царь Часакт がいる。Царь Часакт から次のウルスまで五日かかる。ウルスは Бисут という。そこにいる領侯は Чичен という。Чичен から次のウルスまで五日かかる。ウルスは、Илчигин という。そこにいる領侯は Тайчин Черекту である。Тайчин のウルスから次のウルスまで五日かかる。Бешут といい、そこにいる領侯は Чекур という。Чекур のウルスから次のウルスまで水無しで四日かかる。ウルスは Гирют といい、そこにいる領侯は Чичен нойн である。Чичен のウルスから次のウルスまで四日かかる。ウルスは Тулан Тумет という。

これはハルハの西部の情況を伝えたものであるが、これについて若干の説明を加えたい。[92] ここに記されている Бисут と Бешут は形の上ではやや異って記されているが、恐らくは共にベスート Besüd の異体で、ゲレセンジェの第二子ノヤンタイに分封された一オトクであり、[93] そのうち Бисут の Чичен とはノヤンタイの孫のホンフイ・セチェン・ノヤン Qonqui sečen noyan の子チャガチャブ・セチェン・ノヤン Čara skyab sečen noyan であり、Бешут の Чекур とは同じホンフイの子チェリン・チュググル Čerin čügügür にあたると思われる。[94] また

Илчитин とはやはりノヤンタイに分封されたヱルジゲン・オトクであり、[95] Тайчин-Чередту とはその孫のバドマ・ダイチン・ジョリクト Badma dayičing jorirtu のことである。[96] 更に Гирюг とはゲレセンジェの第三子ヌグヌフに分封されたケルート（キレグート）・オトクのことであり、[97] その Чечен ноян とはヌグヌフの孫で後のサイン・ノヤン部の祖となった J̌odba sečen noyan にあたる。[98]

以上の点は年代記の記録とも完全に一致しており何ら問題はない。ところが問題なのは最初に記される Тормошин, Каракула., Царь Часакт 等の所領である。このうち Царь Часакт とは初代ジャサクト・ハーンのソバンタイ Sobantai のことであり、Тормошин とはその弟のウバンタイ・サルジャ・ダルマシリ Ubantai sarǰa darmasiri のことであろう。[99] また Каракула というのはウバシ・ホンタイジの弟でミンハイ・ハラフラ Mingqai qaraqula のことであろう。[100] ペトリンの報告によれば彼らの所領はそれぞれ Сулдус, Алгунат, Чекурдуш と呼ばれたという。Сулдус とは勿論 Sülduis であり Алгунат はチンギス・ハーンの母ホエルンの出身部族オルグヌート Olγunud と関係があるのだろう。[101] ただ Чекурдуш については如何なる集団であるか分らない。しかしながらすでにみたように彼らの祖たるアシハイ・ホンタイジが分封されたのはジャライルとウネゲトの二オトクであった。ペトリンの報告によっても分るようにゲレセンジェの七子に分封されたオトクはそのまま子孫に受け継がれている。このことはまた、ウバシ・ホンタイジ伝に記されるウリヤンハイのサイン・マジク Sayin majir がゲレセンジェの第七子でウリヤンハン・オトクを分封されたサム Samu の子であった[102]という点からみてもますます明確である。とすればアシハイの子孫たちもジャライルもしくはウネゲトを支配していたはずであるが、ペトリンの報告では全く異っ

ている。また時のアルトゥン・ツァーリ、すなわちアシハイの孫にあたるウバシ・ホンタイジの所領は、蒙古遊牧記によれば和託輝特（Qoto qoyid）と呼ばれたようでやはり異なる。[103] 勿論ペトリンの報告は地域的な限界があり、従ってそれのみで結論を出すことは出来ないが、いくつかの見方が出来よう。一つはもっと別のところで、集団を形成していたということであり、また他の一つはジャライル族に何らかの政治的変化が生じ勢力が弱まったとする見方である。ゲレセンジェの諸子分封はずっと東で行なわれたものであり、前者の見解も取り得るが、他の集団とその支配者との関係からすれば、当然ソバンタイにしろ、ウバシ・ホンタイジにしろジャライルを支配しているべきであり、このことからすれば後者の見解も取り得る。しかしこのことは中期社会のオトクが如何なるものであったかを含めた、より厳密な考証を要する問題であり、ここでは若干の疑問を提出するにとどめる。[104]

(六) おわりに

以上中期モンゴルのトゥメンの一つであるハルハ集団とその形成を中心に若干の問題を検討した。これをまとめると次のようである。すなわちまず集団としてのハルハの名が文献の上に現われるのは漢文・蒙文両史料とも十六世紀初頭のことであった。ハルハ・トゥメンは左右両翼を基礎に内と外の二つに分れたが、それぞれに数多くのオトクが含まれていることを示した。更にこれらのオトクの間の力関係について検討し、内ハルハにおいてホンギラト部が、後にはジャルート部が最も有力であり、外ハルハにおいてはジャライル部が最も有力であったことを指摘した。そしてこれらのことから明らかになった、ハルハに含まれる諸集団、その力関係、更には遊牧地の類似等か

らみて、ハルハの淵源が、元代の左手五部族投下群に求められること、またそれからハルハ集団への移行においてジャライル部が中心的役割を果したことを述べた。ハルハにおけるジャライル勢力はその後外ハルハに限定されるが、ハルハを三分した三汗部の首長のいずれもジャライルの血を引いていることからみて、その力が並々ならぬものであったことが知れよう。かくして従来殆んど明らかにされなかった中期モンゴルのトゥメン形成について、その一端を明らかにし得たと思う。

（大阪大学文学研究科博士課程）

注

（1）森川「中期モンゴルにおけるトゥメンについて」『史学雑誌』八十一編、一号。

（2）和田清『東亜史研究（蒙古篇）』、東京、一九五九、七七六頁。

（3）岡田英弘「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」、『遊牧社会史探究』第三二冊、一九六八、九頁。

（4）和田前掲書、一三四頁。

（5）ガルダン Galdan のヱルデニイン・ヱリヘ Erdeni-yin E-ike にはハルハの名の由来が若干記されているがこれについては別の機会に述べたい。（Nasunbaljir 編、Galdan; *Erdeni-yin Erike*, 1960, Ula-γanbaγatur, p. 65）

（6）和田氏は宣徳七年当時、蒙古の諸酋が相尋いで来投し、哈勒哈河畔の哈剌孩衛が出来たのもこの頃とされるが（前掲書、二二九頁）これも従うことは出来ない。

（7）和田前掲書、四七二頁。

（8）E. Haenisch (ed.) *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geshichtswerks von Secen Sagang* (*alias Sanang Secen*), Berlin, 1955, 65-r, 以下ウルガ本と略称。

（9）Rev. A. Mostaert, F. W. Cleaves (ed.), bLo bzaṅ bsTan 'jin; *Altan Tobči, A Brief History of the Mongols*, Cambridge, 1952, vol. II p. 175. 以下 *Altan Tobči Nova* と略称。

（10）どの年代記もダヤン・ハーンの事跡と関係してハルハの名が始めて記されており、従ってそれは十六世紀初頭のものとなる。

（11）E. Haenisch (ed.), *Qad-un Ündüsün-ü Erdeni-yin Tobčiya*, Wieswaden, 1966, p. 417,

（12）田中克己「ハルハ五部の成立と住地」、『東方学』第十

六輯、八三頁。

(13) 森川前掲論文、四五頁。

(14) 松村潤「『明代満蒙史研究』批評」、『東洋史研究』二三―二、九八頁。

(15) Пучковский (ред.,) Гомбоджаб; *Ганга-йин Урусхал*, Москва, 1960 текст, стр. 46–б

(16) Там же. текст. стр. 48–а

(17) ガンガイン・ウルスハルには、誤りが多くそれのみで結論を出すのは危険である。

(18) 和田前掲書、四五六頁。

(19) Б.Я.Владимирцов; *Общественный Строй Монголов, Монгольский кочевой феодализм*-Ленинград, 1934, стр. 130, 外務省調査部訳『蒙古社会制度史』生活社、一九四一、一二九七頁。

(20) 岡田英弘「ダヤン・ハガンの年代」上、『東洋学報』四八―三、一三二頁。

(21) 例えばウルガ本 61–V, *Altan Tobči Nova*. p. 156.

(22) *Altan Tobči Nova*, II, p.157, Pelinglei (ed.) bYamsba; *Asaraγči Neretü-yin Teüke*, Ulaγan baγatur, 1960, p. 57

(23) ウルガ本 62–v, *J̌alaγus-un Qurim*, 13–v (W. Heissig; *Die Familien-und kirchengeshictsschreibung der Mongolen* I, Wieswaden, 1959, Facsimilia p. 99) Н.П. Шастина (ред.) *Шара Туджи, монгольская летопись XVII века*, М-Л, 1957, стр. 67

(24) *Altan Tobči Nova*, II, p. 164, W. Heissig & C.R. Bawden (ed.) *Mongγol Borǰigid Oboγ-un Teüke*, Wieswaden, 1957, vol. III p. 2–v

(25) ウルガ本 62–v

(26) *Asaraγči Neretü-yin Teüke*, p. 61, *J̌alaγus-un Qurim*, 15–v *Altan Tobči Nova*, II p. 164 *Шара Туджи*, стр. 73

(27) Rev. A. Mostaert, F.W.Cleaves (ed.) *Bolor Erike, Mongolian chronicle by Rasipungsuγ*, Cambridge, 1959, Part III, p. 166

(28) W.Heissig (ed.) *Altan Kürdün Mingγan Gegesütü Bičig, eine mongolische chronik von Siregetü guosi dharma*, Kopenhagen 1958, vol. III, p. 22 (以下 AKMGB と略称)

(29) 例えばウルガ本 65–r *Altan Tobči Nova*, II p. 175 *Mongγol Borǰigid Oboγ-un Teüke*, vol. III 6–v,

(30) *Čaγan Teüke*, 1–v (W. Heissig, *Die Familien-und.....*, Facsimilia, p. 4)

(31) ウルガ本 65–r, *AltanTobči Nova*, II p. 175

(32) AKMGB vol. VI, 2-v、但し AKMGB は外ハルハの年代記たるアサラクチ・ネレトイン・テウケを参照しており、外ハルハのオトクをすべて知っているので、この記述はやや矛盾している。

(33) ボロル・ヨリへはこれを Üčired とゐしているが、これは誤りで Öjiyed が正しい。

(34) *Bolor Erike*, part III, p. 199

(35) *Asaraγči Nereiti-yin Teüke*, p. 73 *Шара Туджи*, стр. 110

(36) Владимирцов, указ. соч., стр. 136. 邦訳、三一〇頁、注㈢

(37) ウルガ本 66-r

(38) 萩原淳平「ダヤン・カンの研究」『明代満蒙史研究』、一九六三、二六五頁。

(39) 和田前掲書、四八二頁。

(40) ウルガ本 63-r

(41) ウルガ本 64-r, *Erdeni-yin Tobčiya*, p. 422

(42) 和田前掲書、一一二～三頁。

(43) ウルガ本 65-r

(44) ウルガ本 66-r

(45) *Bolor Erike*, part III, p. 199 田中前掲論文、八三頁。

(46) ウルガ本、58-v *Altan Tobči Nova*, II, p. 158

(47) ウルガ本、63-v, 65-v もっともダイ・ダルハンになったという蒙古源流の記録は大げさで、或いはアルタン・トプチに記されるように単なるダルハンの号を得ただけであろう。*AT. Nova*. II. p. 174

(48) 更に後には〝ーリン部のシュブハイとオジイェト部のショハイ（粉花）の活躍が目立つようになるが、この間の事情はまた別な理由によると思われる。

(49) *Шара Туджи*, стр. 107～8 この話はすでに佐藤長氏が「ダヤンカーンにおける史実と伝承」（『史林』四八―四）の中で要約して紹介されている。

(50) 原文は činusun であり、シャスティナ氏はこれを отважный（勇敢なる）と訳している。（*Шара Туджи*, стр. 162), činusun には確かにその意味があるが、この場合は問題である。ところでナツァクドルジ氏はこの部分を、「チノスの主ウダ・ボラト」としている。（*Хаахин Тугх*, *Улаанбаатар*, 1963, 25-тар）また松村氏も同様である。（前掲批評、九八頁。）元朝秘史によれば三千の巴阿嘲（Barin）が林の民を併せて万戸となった時、その中に赤那思氏（Činos）が記されている。（那珂通世訳『成吉思汗実録』二九五頁）シラ・トゥージに記される Činos もこれと何らかのつながりがあると思われ、ここはナツァクドル

ジ、松村氏の考えをとるべきであろう。

(51) *Шара Туужи*, стр. 109～10

(52) Там же. стр. 162

(53) *Asaraγči Neretü-yin Teike*, p. 72

(54) Galdan; *Erdeni-yin Erike*, p. 83

(55) 森川前掲論文、四五～八頁。

(56) *Asaraγči Neretü-yin Teike*, p. 73, *Шара Туужи*, стр. 110

(57) *Altan Tobči Nova*, II, p. 189, *Гаваа-ийн Хуучлал*, текст, стр. 46-а, *Шара Туужи*, стр. 85

(58) *Mongγol Borǰigid Oboγ-un Teike*, vol. III, 5-v

(59) 但しこの場合、スメル・ハトンをジャライル出身としたのはその子ゲレセンジェの名声から来たと思われ、恐らくは別部の出身であったと考える。

(60) ウルガ本 69-r

(61) 護雅夫「元初における『探馬赤部族』について」『北亜細亜学報』三、一三〇頁。

(62) 箭内互『蒙古史研究』、一九三〇、三一七頁。

(63) 岩村忍『モンゴル社会経済史の研究』、京都、三一七頁。

(64) 護前掲論文、一三一～二頁。

(65) 同論文、一六一頁。

(66) 『成吉思汗実録』二九三頁。

(67) 護前掲論文、一五七～九頁。

(68) 同論文、一八一頁。

(69) 同論文、一七二～三頁。

(70) 和田前掲書、一一五～六頁。

(71) 同書、一一四～五頁。

(72) 国初群雄事略、巻一一

(73) 和田前掲書、五一三頁。

(74) 護前掲論文、一六一頁。護氏はその他オルグヌートもあげられているが、これも後にハルハの一部族に入っていたことは後述の通りである。

(75) 同論文、一三二頁。

(76) 同論文、二〇三頁、注六五、二〇四頁、注八一。

(77) イキレスはハルハの諸オトクには名前が見えないが、ツォクト台吉の妃の一人は、イケレス Ikeres～Ikires 部出身のホチョイ・ベイジ Qočoi beiji であることからすれば、(*Шара Туужи*, стр. 121) かつてのイキレス部の残りが、ハルハのどこかで小集団を形成していたことが考えられる。

(78) ウルガ本 67-v

(79) *Шара Туужи*, стр. 110

(80) Там же. стр. 114

(81) Там же. стр. 117

(82) 蒙古回部王公表伝、巻六一、喀爾喀扎薩克図汗部総伝。

(83) *Asaraγči Neretü-yin Teüke*, p. 74, *Шара Туджи*. стр. 113

(84) 矢野仁一『近代蒙古史研究』京都、一九二五、一二〇一二一～一九頁。岡田「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」、一一頁。

(85) 蒙古回部王公表伝、巻四五、喀爾喀土謝図汗部総伝。

(86) 同書、巻五三、喀爾喀車臣汗部総伝。

(87) *Шара Туджи*, стр. 114 このサブダタイはオイラトとの戦いで若くして殺されている。（岡田「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」一一～一二頁。）しかしサブダタイの系統は断たれずに続いており、従ってエリェケイが力を得たのは、サブダタイの死だけではなく、その背後にジャライルの力があったためと考える。

(88) *Шара Туджи*, стр. 112

(89) 例えばゲレセンジェの第六子ダルタンの二子、オウバ・ブダとジョンドゥ・ダイチン・バートルはそれぞれジャライル出身の女を妃の一人としている。（*Шара Туджи*, стр. 117～8）

(90) この記録は早くから注目され、㋑Baddeley の "*Russia, Mongolia, China*" の中で The First Russian Mission to China (vol. II. pp. 65～86) の形で紹介されている。最近では㋺*Материалы по Истории Русско-Монгольских Отношений 1607～1636*, M., 1958 の中に原文で載せられている（文書番号 No. 34）。これについて、Н.Ф.Демидова と В.С.Мясников の編集で㋩*Первые Русские Дипломаты в Кишае*, M., 1966 が出されたが、その中にイトリンの報告が "Роспись Китайскому государству, и Лобинскому, и иным государствам, жилым и кочевным, и улусам, и великой Оби, и рекам и дорогам という題で載せられているが、そこには異本が二つ、原文書の写真、更には注がつけられており、最も充実している。また最近出版された㋥ *Русско-Китайские отношение в XVII веке*, том I, M., 1969 にもイトリンの報告が含まれるが、（No. 26）これはすべて㋩に基いたものである。

(91) *Первые Русские Дипломаты в Китае*, стр. 42, вариант I.

(92) ここに記されている固有名詞については、シャスティナ氏の *Первые сношения монгольского государства с Алтын-ханами Западной Монголии*, M., 1950 という本の中で詳しく解説されているとのことであるが、未見である。

(93) *Asaraγči*, p. 73 *Шара Туджи*, стр. 110

(94) *Asaraγči*, p. 76 *Шara Tüǰü*, стр. 85

(95) *Asaraγči*, p. 73 *Шara Tüǰü*, стр. 110 なお *Шara Tüǰü* はこれを Enǰigen otoγ としているが *Asaraγči* の Eljigen に従うべきであろう。

(96) *Asaraγči*, p. 76, *Шara Tüǰü*, стр. 113

(97) *Asaraγči*, p. 73 *Шara Tüǰü*, стр. 110

(98) *Asaraγči*, p. 84 *Шara Tüǰü*, стр. 115

(99) *Asaraγči*, p. 73 *Шara Tüǰü*, стр. 118

(100) *Asaraγči*, p. 74

(101) 『成吉思汗実録』、二八、三四頁、ウルガ本 26-r

(102) 岡田前掲論文、六頁。

(103) 張穆『蒙古遊牧記』巻一〇、喀爾喀西路扎薩克図汗部。矢野前掲書二九頁。

(104) 興安嶺東側の扎賚特(J̌alayid)は和田氏の述べられているようにかってのジャライル族の流れをくむものと考えられるが(前掲書、一一六頁)、その支配者はハサルの後裔となっており(蒙古回部王公表伝、巻二二)、地理的な点も含めて、ハルハに属していたジャライルと直接的な関係は無いと思われる。

〔附記〕

本稿の印刷中、Д. Гонгор 氏の *Халх Товчоон I, халх монголчуудын өвөг дээдэс ба халхын хаанч нар* (*VIII–XVII зуун*), Улаанбаатар, 1970(『ハルハ史要略 I、ハルハ・モンゴル人の祖先とハルハ汗国(八〜一七世紀)』)を手に入れた。書名からも知られるように、一部本稿と同様の問題を論じており、また参考にすべき点も見られるが、本稿には全く利用出来なかった。